

武等名水兵

吉中太郎

口供

明正二年七月四日午後一時三十分より當院に長
高見宅第一階より當院に水漬当院に大座
作業あり外に庫外に乾かす方あり
及ニ系車裏の片に貯る庫内棚上は掃き終
了庫内ニ水ヲ注時キ掃き除く為ニ三時三十分より
歸り形不庫内ニ三十分論作業中ニ二時西坊
掃き制り及煙波而シ在在ニ思右系車仕
回し終り此際ニ三十分過ぎ也
明正二年七月

0648

水列々道舟

0649

戴等若水兵

見玉力

口供

明治十一年七月四日午後時三十分より堂内
首見室に即ち座りて堂内を巡りて捕当形大
致有作業ありて堂外に乾草を貯りて
乱雑に束装して貯る庫内には松上様林
終に庫内へ水ヲ貯りて爲三時三十分
より即ち於ス庫内ニテハ勿論作業中ニシテ
而して林部制より吸煙せしむ仕立等
類ハ皮を以て中ニ致して法解して遠
中候也

明治十一年七月

0650

二等若水兵前田盛上

口共

明治十一年七月四十年前細孔乃ハニ下敷
輕房路ニ午為土所ニ午チノ分
南並ニ上と摩子仕成形おも返
無西産也

明治十一年七月

四十六

藤原朝臣

0652

水列有之

0653

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp>

示着水共那原然次

口告

明正軍七月四日午時
劫及バント野砲臺及方砲
臺金物廢貯庫中揚除
三午ふり別為艦午口
不仕世米古遠無以産也

二年七月

0654

二等家水無丸山古古

倍

明正三輝七月四日午未中系嘉表并綱
記子等私官并自在砲並物磨路十時之
十分後始能解家後〇時三十分合庫
中概掃除等物路五分約五分時五分
有利向能但路り吸糧五分候共米米遠
無由生也

三年七月

四十九
黃頁實造公行

0656

火災長梅田貞吉

口述

明治十三年七月四日午前八時頃、別三等火事、火事河
 令麻枝二等若火事、中右取布同丸田後剛
 ノ之名工器、城諸品、磨キ方ノ為、大油小虫之金
 剛、砥布ナスレ等持々セ、引連レ行ク海上通船、
 テ割烹取酒、白武ハ郎ト行逢テ、家ニ於テ大
 砲庫海辺部、合戸口ヲ開キ、而大庫内空地、工板切
 レシ、敷キ然ル後、庫内器、撤方物置ノ錠ヲ開キ
 「ソニキケート」ニ附着、用金物ウオートルケール
 翻ヒ金物器、撤室備付、大方ソレク、ロースハット、摺
 金ヒ金物、蘇ト、城、取リ、周糸、腐ヲ取リ、出エ、互

△戸口錠ヲ受取
 通船着スヤ石
 ヤ大砲庫海辺部

本列の各品は身付

前、如ク物置ノ錠ヲ開キ右ノ取り出シタル金物

ヲ取前敷キタル板カレノ上ニ油磨キテ其ノ

後九ノ午前九時又物置ノ錠ヲ開キ新ニキメス

一奉ヲ取出ス其節物置ハ錠鎖致サス候リニテ

締メ置キ午前未業終リ右ノ磨キ終リタ

ル品ハ別段ニ板ヲ敷キ此上ニ載セ置ク物置錠

前ハ益々重キ屬艦スルハ開キ置キ又リ糸屑ノ

格別汚レザル分ハ一塊ニテ置キ一時ニテ六砲

庫海辺部ニ如錠ヲ開キ揚艦スル午後一時頃

申リ右ノ人員再々方砲庫へ行キ午前未業終リ

續キテ始メ其他ハライルコツク磨キ取掛ル

ルノ午三時物置ノ錠ヲ開キ糸屑少許ヲ出

ス其後密撤室備付方ラニテ磨キ海ノ上物

置内工納ム而テ錠ヲ閉ツキテ業海為ニ至テ中
磨キタル場所辺ハ河合麻枝工揚捺致サセ汚レ
糸屑等ハ海辺草叢中ニ河合投捨ス而シテ大
砲庫海辺部ノ戸口錠ヲ閉テ局船下並ニ後
三ノ

三ノ火支河合上麻枝口述

一上ノ年七月四日午前ハ所ヨリ油小出ニ至剛
砂布「マス」等ヲ持テ密撤請品ニ磨方ノ為ニ大
砲庫ヲ行ク直ニ庫内空地ニ板カレヨ敷キ
「イン」ギケイ「トル」附着庫金物「ウ」オー「トル」ゲ
「トル」國ニ金物密撤室備付大ランプ「ク」ロ「ス」
「ット」シ槽金ニ金物等油磨キ方「ク」ロ「ス」

本邦有るは身可

へツト摺合セ金物ヲオートルゲルニシテ固シ金物則
 磨キ終りタル以上二品ハ別段ニ板ヲ敷キ此トニ載
 セ置ク糸屑ノ格別汚レザル方ハ一塊ニナシ置キ
 上時ニ至リし頃ニ至テ向船ス〇午酉ノ時頃日利ノ再
 ヒ方砲庫ニ行キ午前ノ時葉ノ纏キヲナシ其地
 方イルコウクニ磨キ方ニ取掛ル其後九ノ時過大
 ランブレハ磨キ済ノと物置内ニ胡ハ葉葉添
 前ニ至テ磨キタル場所辺ハ自ら揚除シ汚レ糸
 屑ヲ海邊草中ニ投捨ス而シテ午後三ノ時
 半頃ニ帰ルス

0661

二等差火中村駐師

口遊

一十二年七月四日前、時、利由小出之金剛
砂布ハマス一等ヲ持テ密搦諸品磨石ノ為テ大
砲庫ニ行ク為テ庫内ニ云々右河右ニ同ニ余
ハトモ紫海陽艦ノ所油ノハタル上黨ヲ持テ帰
艦ス

同地田後剛口遊

一十二年七月四日前ハ河大砲庫ニ密搦諸品
磨石方ノ為メ行キ方々テ庫内空地ニ板地等
ヲ敷ク云々其地遊傍井ノ利由谷且手洗
水ノ水ヲ汲ミ奉ル又午後夜業為ニ至テ

上
夜類
之
脱
之
行
ヲ
扱
フ
余
ハ
右
ニ
同
シ

本
列
カ
キ
主
身
可

0663

口供

學始以長

高見宅郎

秘儀明治七年七月廿五日
 小水と湯火砲庫陸揚と水
 中地海陸兵小銃隊隊長
 依テ二等兵隊部次長
 後於一週に於て時機
 全物を報告せられたる
 知りて其時爲る夏風
 田於て於て水以テ洗
 陸揚と致す此時湿度
 下ケルと致す此時湿度

五十三

黄頁四頁通公行

0664

本邦列島に身可

終テ胞息苦磨キ古ノ如ク其内ニ其息ハ其
 場内魚古キ名者無ク其場内ニ其息ハ其
 土國公國人来ル候テ外此其ノ内ニ其息ハ其
 午後一時ニ其身ハ此ノ外此其ノ内ニ其息ハ其
 し陸上大砲場ハ此ノ外此其ノ内ニ其息ハ其
 不立行有ケル方ニ其息ハ其ノ内ニ其息ハ其
 故春水波ハ其ノ内ニ其息ハ其ノ内ニ其息ハ其
 ラ費ス終テ庫内ヲ掃除スル候ニ其息ハ其
 且其息ハ三時世ニ其息ハ其ノ内ニ其息ハ其
 其右ノ中業中ニ其息ハ其ノ内ニ其息ハ其
 此ノ右ノ中業中ニ其息ハ其ノ内ニ其息ハ其
 但シ右ノ中業中波江野際飛去見也(シタリ)
 右ノ通ル事也

前より通ぬ孔の空を尋ねて見よ通ぬか

今も此の空に居るや

昭和三年七月五日

二番分隊長

町田中尉

副長

受

0666

林邦彦 近舟 四

0667

口供

乙等若水兵

堀内龜吉

新永明治十二年七月四日午前八時三十分
 業姓より掌砲法長高見宅郎に隨從
 本ヶ浦大砲庫に行李直三葉巻及七銃
 羽亂田附屬品中ノ庫外ノ「ケツト」ヲ敷
 是ノ區分ニテ取廢ヲ乾久支ヨリ砲臺全
 物廢棄方々ナシトシテ過半番兵ニ為メ
 歸艇倉庫事終テ上階ニシテ大砲庫に
 行ク高見其他歸艇致ニ私産人番兵ニ
 為殘存兵番兵中ハ異狀無ク山供出五
 名程其側ヲ通行而已ニテ外ニ人民等

水引卷五頁四

立寄居矣蓋之尤名番兵甲一度檢閱
程右側草中江小便之為之立退キ其奈ハ
一切位置相脱之及矣之每之反

午後幸時高見掌施法長其他素之庫
直ニ金物磨平方ヲナク又ヨリ乾之先諸

物品ヲ取由相上ニ積重方ヲナク終テ
余ノ暑氣強キ故吾水敷之度^諸圃掌

施法長^江申出茶籠^江取来一回^江寄春
久致之九十分時間ヲ費セリ^江佐庫内ヲ掃

除^江テ高見^江テ締^江テ久^江而^江同一^江三時^江幸^江
以^江淨^江無^江テ

右事業中ハ吸煙且ツ發火^江幸^江之^江致^江一切
取^江扱^江不^江致^江反

0669

右ノ通相違石中上片也

前書ノ通取紀及信事業未達
多々及系此候所届申出片也

二番合隊長

明治十三年七月五日

所 田中尉

副長

等

五十六

東京府立文庫

0670

口傳

二葉牙者

寺也

私教の語に年七百四の年を以て降すとの事
 始りて世に絶たざる事を見れば此の道は永く
 大徳庫の如く年直に少く鏡眼亂りては是れ
 甚く事多し庫外に少くは事多し是れは道に
 取違ひの事少く又少くは事多し是れは道に
 三十分は白龜十多番は其の道に少く見
 其の保解は
 多後一時は高見の事也長具介の事也
 再大徳庫の如く年直に少くは事多し是れ
 鏡眼亂るは海客の事也入の如く是

五十七

黄頁寶蓮寺

0672

私傳

一昨四時後上矢砲格納的三粒而胆乱八下
呆次葉囊及大砲手入才ト三ノ掌子砲波長
高見宅即出張云云申付水六六久
百連ノ為多志之於三符右為見嬉生其の
力府以日一季、西哉同十村三子多九由
形乃中出候也

明治三年七月六日

掌砲長波江野直喜左衛門

九十八

黄頁

0674

記録課 長
副長

編纂掛

寫字掛

長官

副官

赤松

事務課長

同課僚

同課僚

木鈴

福原

同副長

起案

伊田

二月五日

御用掛 事務課長 赤松

同副長 福原

同課僚 木鈴

伊田

御用掛 事務課長 赤松
同副長 福原
同課僚 木鈴
伊田

五十九

母

0676

其書之類也

其書之類也

其書之類也

其書之類也

其書之類也

其書之類也

其書之類也

不_レ_レ夫_レ公_レ不_レ四_レ抗_レ...

福_レ比_レ河_レ軍_レ大_レ施_レ待_レ...

我_レ... 北_レ... 二_レ... 中_レ... 西_レ...

義_レ... 不_レ... 決_レ...

海_レ... 河_レ... 中_レ... 村_レ... 氏_レ... 義_レ...



秘_レ入_レ第_レ百_レ八_レ十_レ四_レ...

六_レ十

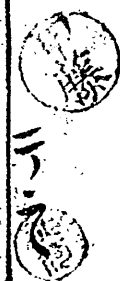


0678

刑令右云乃二十号

起案
月日

十三年一月十二日



長

課長

起案高坂

課僚

龍驤艦々長海軍大佐福寫敬典待罪書

ニ就キ見上

本人待罪書及ヒ関係ノ書類ヲ審閱スルニ出
火ノ件ハ其原因判然セサルヲ以テ罪ノ問フハ
キナシト虽モ副長不在中在艦セス且掌砲上
長ノ装薬火箭等ヲ他物ト混藏ナシ置キタル
ヲ心付サル廉ハ刑事ニ觸ル、モノト見上候
但掌砲上長浅海太郎次義ハ装薬ノ火箭
等ヲ自己ノ計ヒテ他物ト共ニ容易ク
混藏セシ件ハ其責メアルモノト見上候

六十一 海軍省 裁判所

0680

記録課長
副長

編集係

寫字掛

長官

副官

赤松

事務課長

同課僚

同副長

起案

月記

精治の父は雨宮の藩士にして其の

子に於ては其の藩士にして其の

父に於ては其の藩士にして其の

父に於ては其の藩士にして其の

父に於ては其の藩士にして其の

秘出費三百三十三号

六十二

要

0682

朱

但

抄

撰

任

職

記

後

0685

記録課長
副長

編纂掛

寫字掛

長官

副官



事務課長

同副長



同課僚

起

七月廿六日



Vertical columns of handwritten Japanese text in cursive style, likely a record or document.

六十三

0684

此を纏と稱し之を倉庫焼失と
記す

癸火之原因未だ極ラ
詰バス

少可量ゆゆ火器ヲ貯ル

之為ニ而産ハ多ク損

害ヲ興スルハ其責任

モ未だ定マラズ

禮モシテ注シテ

所々更ニ考セザル

可也

0685

記録課 長
副長

編纂掛

副官



事務課長
同 副長

昭和二十一年八月二十日
福地 宗太郎
宗太郎 宗太郎
宗太郎 宗太郎
宗太郎 宗太郎

六十三

十三年

梅白の花の香る

もろゝ

0686

萬方一途其厚内之於...
一山者...
厚内...
一切...
信...
探...
是...
却...
六十五

0689

身方且考程中言防生隊擇也
元身方且可風無動以道之
即重天已砲若故備矣信之何之
私用之亦之為出氣信於身以命
此成之至也何也信之言之其深
信之信是也

治讓程之長

六十七

0693

享和七年七月

海軍大臣 佐藤 信淵 敬典

海軍少将 村松 義成 殿

0694